随感　ゆりかごの小沼丹

中村　明

一九五四年から五五年にかけて「村のエトランジェ」「白孔雀のゐるホテル」「黄ばんだ風景」「ねんぶつ異聞」と相次いで芥川賞候補となる。小沼丹の名はその頃から世に認められだしたのだろう。そこに至るまでのこの作家の文学的開花の過程はほとんど明らかにされてこなかった。去年、大島一彦・高松政弘と共編で書肆未知谷から大冊の『小沼丹全集』全四巻を出した。その機会に調べあげてできるだけ詳細な年譜を作成したが、編集方針により第四巻には簡潔な形で記すこととなった。その後、中学時代の文章が新たに発見され、今年になって追加した補巻に収めた。年譜では当然その件にふれていない。世に知られるまでの小沼文学の揺籃期を、年譜の形を借りて散策してみよう。

本名小沼救（おぬま はじめ）、のちの作家小沼丹（おぬま たん）は、午年の一九一八年の重陽の節句にあたる九月九日に、当時の東京市下谷区下谷町（現 台東区下谷）に、父小沼邁（すぐれ）、母涙（るい）〔自筆年譜には「涙子」とある〕の長男として生まれる。六年後に生まれた妹眞理枝と二人兄妹として育つ。小沼家は祖父の代まで会津藩士であったが、父は牧師でセツルメントの館長を務め、姉が三人〔長姉は早世したとのこと。二番目の姉が「細竹」「小徑」などに描かれる、田園調布に家があり逗子の別荘に住む伯母。三番目の姉が「影絵」などに描かれる、兵庫県の寺に嫁いだ伯母〕あった。母方の小林家は信州南佐久郡青沼村の名主の家柄で、母には早世した兄のほかに姉が一人、妹が一人、弟が二人〔次男宗三（そうぞう）は地方新聞の記者をしている肥った叔父、三男は野球のチームを率いる小叔父。ともに野球好きとして「千曲川二里」「童謡」などに描かれる〕あった。

一九二五年四月、東京市南葛飾郡本田小学校に入学。もともと画家志望だった父は厳格な反面、優しい目をした馬の絵を描いて子供たちに見せたともいう。後年、この作家自身も印象派の絵を模写して部屋に掛けていた時期があったらしい。晩年も入院中

に大学ノートに人や特に馬の絵〔午年生まれに関連があるか〕をせっせと描き続けた。多年持ち続けたイメージをスケッチしたと思われるそれらの絵は、一九九五年一一月一五日から翌年二月三日までの分が、没後、次女の川中子李花子（かわなご りかこ）編『馬画帖』という私家版に収められている。

その本によると、自分で描いたお化けの絵を手洗いの中に貼って妹を驚かすなど、小沼少年はいたずら好きだったらしい。もも代という上州生まれの気立てのよい元気な女中がお気に入りで、よくいたずらをしかけては追いかけられていたそうだ。東京の下町にあったセツルメントでは、親が共働きのため勉強を見てもらえない子供たちのために夜学を開き、YMCA関係の大学生がそういう境遇の小学生・中学生に勉強を教えていたが、小沼少年も自然にそこに加わり、お菓子を食べながらの談笑の輪にも入るようになって、大学生たちを敬愛する気持ちが次第に強くなっていったようだ。後年、大学教員をやめて小学校の先生になろうかなと、冗談めかして娘につぶやくこともあったという。自身、小学生の時から英語の習得に積極的で、のちの作品「カンチク先生」にユーモラスに描かれているように、英語の個人教授を受けている。

一九三一年四月、明治学院中学部に入学。ミッションスクールの選択には、牧師であった父親の期待か、何らかの影響があったと考えるのが自然だろう。中学時代に英語を教わった米人教師のミス・ダニエルズについては、後年の作品「汽船」に「ミス・ダニエルズの追想」という副題をつけ、いくらかおどけた筆致で、その思い出をしみじみと語っている。この頃に夏目漱石を愛読し、仲間と句作に興じたともいう。また、スポーツに関心が強く、妹を相手にボクシングの真似をしたり相撲やテニスや水泳を教えたりしたらしい。英語の弁論大会が近づくと、やはり妹を前に身振りまじりで練習し、本番でみごとにカップを手にしたという。普段でも、家庭でその妹を相手に、実際の動作に合わせながら英会話を実演したり、セツルメントを見学に来る外国人の通訳をさせられたりしたこともあるようだ。

一九三四年七月、明治学院中学部文芸部発行の雑誌『白金の丘』六八号の《創作》欄に四年生の小沼救の名で「毛虫」と題する作品が掲載された。それは「一匹の若い毛虫が木の葉にねそべつてゐた」という一文で始まる。主人公は「高慢ちきなすました毛虫」だ。テントウ虫に出会い、「緑の国の王だといはぬばかり」の態度で「おれに従ふ気はないかね」と話しかけるが、テントウ虫は「いやなことだ」と「ブーンととんでいつた」。次に「おれは蝶の王とな

る身だ。さて良い友を撰ばねばなるまい」と思い、餌をあさっている雄鶏を勝手に「栄ある友に撰」ぶが、相手は「おまへはおれの昼食に丁度いゝ」と、「毛虫を口にくはへてごくんと飲みこんだ」として終わる寓話的な作品である。

同じ四年生の翌年二月、同じ雑誌の六九号のやはり《創作》欄にもう一編、「尊き物」という作品が掲載された。それは、「遠くに山々が霞んで見える。緑の芝生がずっと続いてその山の麓でつながってゐる。山の蔭から森に見えかくれしつゝ、その芝生の側を長く長く銀蛇の様にうねりつゝ二本の鉄路がのびてくる」という描写から始まる。主人公の太吉は踏み切り番だ。ある日、線路の点検をしていると、「カーン、カン、カン、カーン」という音が聞こえる。若い与一が腹を立てて、「ハンマーを振るつて線路を外してゐ」たのだ。「もうネジは外されてゐた」。「その時彼は汽車の汽笛を」聞く。このままでは「枕木が外れて、崖から多くの人や子供が……」と思うが、もう間に合わない。とっさに太吉は「ポケットからナイフをとり出して布をつまんでしわをのばし」、手を振り上げてその「ナイフを自分の腹の関節に突き刺した。さっとふきでる血潮は布をそめていった」。迫って来る汽車に危険を知らせようと太吉は「夢中で血の旗をふった」が、「目の前が暗くなり頭がふらふらしだし」て、「ばったり倒れた」。が、旗はそのまま地に落ちることはなかった。すっかり改心した与一が「その旗をしっかり握って立ってゐた」のだ。こんなふうに、筋自体は修身の教科書にでも出てきそうな典型的な美談だが、「朴訥な老人の少しもいつはらぬ態度に彼等はいつも微笑を送るのであった」とか、「彼の吹く草笛はピーピーと遠くすんだ空に冴へ渡った」とか、わずか半年後の作品とは思えないほど、小説らしい文章に向かって大きく踏み出したように見える。

一九三六年三月に中学部を卒業し、四月に明治学院高等学部英文科に進学する。夏に家族が大阪に転居。一時は友人宅に滞在したが、すぐに下宿生活に入る。この年、真鶴でキャンプがあったという。その後三年ほどして両親と妹は倉敷に移る。そこの教会に長く住み続け〔妹の眞理枝は現在、東京に在住〕、特に一九四一年以降、その倉敷の家に時折帰省した模様。

一九三七年二月末に転居。四月に二年に進級してから髪をのばしたという。夏に通訳を兼ねて野尻湖に行く。一二月発行の『白金文学』第三巻第二号にこれも小沼救の名で小説「機関士」を発表。これは、「裏町に奏でられた一つのフユネラル・マーチであり、それが凡てゞある」ということばを題脇として

掲げ、本文は「今日も子供は停車場の、黒く焼いた垣に擲まつて汽車を見てゐた」という一文で始まる。「来年からもう小学校へ入るといふのにこの子供の頭脳は四五歳の幼児の様に幼さなかつた」ため、「日やとひ人夫」の父親にも、母親にもかわいがってもらえない。いつもの「ウツロな目」が汽車を見る時だけ「楽しげに輝いて見える」。実業家のお邸の芝生の庭で、その金持ちの家の子が「電池で玩具とは思へない位精巧な汽車を走らせてゐる」のを垣根越しに眺めていると、「他人の家をのぞく奴があるかバカヤロー」とその家の下男にどなられる。その後、ある店で「木で出来たペンキの香のする」玩具の汽車を見つけ、たまらず「両手をのばして腕に抱いた」。すると、店から男が出て来て「子供の頬をはりとばし」、「バカヤローこの盗棒め」と親の所に突き出した。母親は「餓鬼のくせに太い量見起しやがる。汽車にでもなんでもひかれて死んじまへ」と言ったまま「家に入つて戸をピチャンとしめてしまつた」。子供の「足は自然停車場の方へ向」かう。よく見えるように「暗くなると子供は線路の中に入つた」。「子供の死体は翌朝、駅員に見つかつた」。そして、白木の箱の前には、駅員のくれた立派な汽関車が飾ってある。その「せまい家には今日一日母親のススリ泣きが途絶えさうにもなかつた」と作品は閉じられる。悲劇としていかにもありそうな筋で、作意も見え見えだが、作品としての整合性がある。「頭だけが異状に拡がつたがこの子の手足は又大変細かつた」という身体的特徴を明記し、「ヨレヨレの小倉服は所々穴があいて綿の様なものがハミ出てゐた」といった服装の特徴をきちんと描写する。そういう外見だけではない。「段々物に怯える性質（さが）を深く深く心の底に刻みつけていつた」と性格描写を含めて人物像を刻み、さらには「首輪のない犬がヨロヨロと鼻を地につけて通り過ぎて行つた」という情景描写を折り込むなど、表現面でもさらに成長の跡が見える。

一九三八年の四月に三年に進級。この頃から文学に対する関心が強まり、ヘッセ、マン、フイリップ、それに井伏鱒二を愛読したという。夏、前年同様、野尻湖行き。秋には、のちの作品「寓居あちこち」に「深見権左衛門」とある、三鷹村牟礼の旧家深見家に下宿。三鷹艸庵と称したらしい。一一月に信州に旅行し、同月、「千曲川二里」を執筆。

一九三九年の初め〔あるいは前年末〕に「千曲川二里」が『白金文学』に載り〔明治学院歴史資料館の調べによれば、掲載号の現物は確認できないものの、この時期に刊行された号に載ったものと推測されるとのこと。やはり小沼救の名で載ったと考えるのが自然である〕、その掲載誌を井伏鱒二に寄贈。読

後感を記した葉書を受け取ったのを機に、三月頃〔井伏鱒二の随筆「小沼君の将棋」によれば、この年か翌年かの一一月頃だったと将棋を指しながら当人が言ったという。Lの字の襟章をつけた明治学院の制服姿の小沼君は記憶になく、早稲田に入ってからは和服に角帯をしめるか袴をはくかしていたと井伏は回想する。雑誌が半年以上も遅れて刊行されたとすれば、一一月説も否定できなくなる。また、信州旅行と作品執筆、少なくとも「千曲川二里」の執筆が仮にこの年のことだとすれば、井伏訪問が一九四〇年の出来事だということもありえないことではない〕、井伏宅を初めて訪問し、それ以後、文学における終生の師と仰ぐ。のちに、井伏を介して太宰治を識る。

一九四〇年四月、四年に進級。この年に早稲田大学で開催された日比学生会議に出席。ハックスレイ、ロレンス、ジョイス、キーツ、ニーチェらを読みあさる。この頃から文学書を集め出し、自らも短篇を書き始める。筆名「小沼丹」の「丹」は、祖父の姉妹の嫁ぎ先に、明治・大正・昭和にわたる寄生虫学者で科学随筆にも才能を発揮した慶応義塾大学教授の小泉丹（まこと）がおり、その人物に惹かれたところからという。その弟の鉄（まがね）が「白樺」にも参加した物書きであったことも、小沼丹の文学的な関心に影響を与えたものと思われる。この年、一月に「佐野一郎」〔九枚　＊枚数は以下いずれも初作従え書き風のメモによる〕と「植木」〔二枚〕、六月に「人形芝居」〔二三枚〕、七月に「寓居あちこち」〔二六枚〕を執筆。この年の夏、大阪に帰省。一〇月に「福楽寺」〔三〇枚〕を執筆。一二月に「湖畔」〔一〇〇枚〕を執筆したほか、この年に二七の短篇を執筆した旨、備忘録の中にあるなど、華々しい文学的出発を遂げる。

一九四〇年、二月に「悪魔」を執筆するも未完に終わる。三月に「谷間」〔六三枚〕を執筆。同月末、明治学院高等学部を卒業し、四月に早稲田大学文学部英文科に入学。チェホフを愛読、森鷗外・葛西善蔵を読む。五月に「狐の嫁入」〔二四枚〕と「安堵」〔三三枚〕を執筆。六月には「寓居半歳」〔七四枚〕を執筆するが、翌年発表の作品「寓居あちこち」の原型かもしれない。同月、級友らと同人雑誌『胡桃』を発刊し、創刊号に前年に脱稿していた「福楽寺」を発表。七月に「高崎」〔三四枚〕を執筆。ちなみに、同月九日脱稿らしい日付入りの父邁の執筆原稿が明治学院に保管されている。同年六月下旬に死去した井深梶之助〔明治学院二代目総理〕の思い出を、同窓会発行の『明治学院時報』九七～九九号に掲載する予定で執筆を依頼したものらしい。「我が家に父の用ひた一冊の新訳全書ありてその扉に」と始まり、その父榮吾

が佐世保で洗礼を受けた旨そこに記載されていることを述べた短文だ。が、なぜか掲載された形跡はないという。夏休みには例の野尻湖行き。また、大学の仲間、玉井乾介〔岩波書店を退社後、バンコクやサンパウロの大学で日本語を教えた。「風」その他の作品にしばしば金井として描かれる〕、伊東保次郎〔「昔の仲間」「翡翠（とり）」などに描かれる〕と三人で新潟・酒田・佐渡に旅行。この旅行については後年「昔の仲間」に詳しく描かれる。井伏鱒二の奨めで石川隆士〔「翡翠」や随筆「長距離電話」などに登場〕との交友も始まる。一〇月に「燈台」〔三五枚〕を執筆。一一月に「海のある町町」を執筆し、同人誌『胡桃』に載せるが、同誌はその第二号で廃刊になる。備忘録によれば、この年に二二編の短篇小説を執筆したという。

一九四一年、早稲田大学文学部の創作合評会で短篇「寓居あちこち」が谷崎精二教授の推挽により『早稲田文学』二月新人創作特集号に掲載され、在学中に同誌に作品を数編発表するきっかけとなった。春、倉敷に帰省。大学二年のこの年は、四月に「二人の友」〔四二枚〕、五月に「麦秋」〔三八枚 のちの同題の作品の原型か〕と「酒」〔三三枚〕を執筆。この頃に丸山和子と知り合う。この夏は在京。九月に「遠出」〔三〇枚〕、一〇月に「白い街道」〔二七枚〕、一一月に「細道」〔二六枚〕および「de jongleur de Notro Dame」〔六枚〕を執筆。この年にその他多数の作品を執筆したと備忘録にある。

一九四二年、旧作「千曲川二里」を推敲して『早稲田文学』新年号に発表。二月に「鉛の兵隊」〔六枚〕、三月に「賢人」〔三三枚〕と「老師」〔二四枚〕を執筆。春に和子が入院。六月に「登仙譚」〔三三枚〕を執筆。この夏も在京し、九月に「一匹と二人」〔二五枚〕、「瘤」〔三〇枚〕、「十瓢四内」〔七八枚〕を執筆。このうち「遠出」が『早稲田文学』九月号に掲載される。小林達夫、吉岡達夫らの同人雑誌『文学行動』に加わり、九月号に「登仙譚」を発表。九月、早稲田大学を繰り上げ卒業となるが、出席不良のため教練検定は不合格。一〇月、丸山和子の父が学園長を務める武蔵野の私立学校盈進学園に勤務。同月に「新米教師」〔五七枚〕、一一月に「ダビデ」〔二四〇枚〕を執筆。『文学行動』一二月号に「瘤」を発表したほか、同誌に旧作「燈台」などを発表するが、第一次のこの雑誌は用紙不足のため翌年休刊に追い込まれる。この年、ほかに数編の創作がある旨、備忘録にある。

一九四三年二月、閑古庵に移る。谷崎精二の推挽を得て『早稲田文学』の同人となり、三月号に旧作「一匹と二人」を発表。三月、丸山和子と結婚、後年の作「藁屋根」の舞台となる武蔵野市関前の大きな藁屋根の家に住み、二階の一〇畳と八畳の二部屋

を借りて新居とする。四月に「喪章」〔四〇枚〕を執筆。『早稲田文学』六月号の同人雑誌評を担当。六月に「黒白」〔四五枚〕、七月に「大学二年半」〔二五〇枚〕を執筆。夏、蓼科に行く。一〇月に後年の作品「揺り椅子」の原型となる「柿」〔一八枚〕を執筆。

一九四四年一月、長女の諄子（あつこ）が誕生。二月、風塵荘に移る。この頃より空襲始まる。『早稲田文学』三月号に「柿」を発表。三月、三年前の作品を改作した短篇「幸福な二人」〔八枚〕を執筆し、『早稲田文学』六月短篇特集号に発表。六月、感想「文学への意志」を執筆し、『早稲田文学』九月号に発表。夏、倉敷に帰省。七月、チブスにて入院し、三ヵ月ほど病臥して秋に帰京。かなり肥ったらしい。一〇月に、後年の作「藁屋根」の一部となる「時雨」〔四枚〕を、一一月には「帰郷」〔四九枚〕を執筆。秋に空襲が始まったため、暮れ近くになって和子と諄子を母方の伯母にあたる内津家に疎開させる。千曲川沿いに走る小海線の沿線に位置し、貯水池の近くだったという。しかし、赤ん坊の病気をきっかけに程なく東京の家に戻る。

一九四五年、『早稲田文学』二月号の文芸時評を担当。三月には、後年の作「猫柳」の一部となる「早春」〔二〇枚〕を執筆。春から空襲が激しくなり、妻の和子と一歳の諄子を、今度は和子の母方の叔母の嫁ぎ先にあたる家に疎開させる。信州の稲荷山で武水別（たけみわけ）神社の神官を務める宮川家で、前の疎開先より千曲川の下流にあたるそうだ。一人東京に残った丹自身は、自宅が中島飛行機武蔵工場の近くにあったため、しばしば空襲を受けて危ない目に遭う。六月、勤務先の学校が爆撃に遭って倒壊し休校となるに及んで、自らも妻子の疎開先である長野県更級郡八幡村の家に合流。松尾芭蕉の「更科紀行」に出てくる八幡の里で、月の名所姨捨の近くに位置し、現在の千曲市〔前の更埴市〕八幡にあたる。そこの宗三叔父の世話で八幡村の学校の臨時教員となる。田畑づくりの農作業ばかりで勝手がわからず、見物に専念したと自筆年譜にはある。この間の生活は後年の作品「古い編上靴」や「童謡」などに詳しく描かれている。八月に同地で終戦を迎える。一〇月に東京に戻る。汽車が上野に近づくにつれて、すっかり焼けてしまった東京の姿に驚き、「その焼野原に点点と灯が疎らに散らばってゐるのを見ると涙が出さうになつた」と長編「更紗の絵」の冒頭近くにある。そこに「とりあへず細君の実家に落ついた」とあるのは、保谷の柳橋の近く〔現在の西東京市〕にある和子の実家丸山家にしばらく寄寓したことをさす。小説に「その近くに家庭を持つてゐたのだが、吉野君の細君と赤ん坊が信州に行っている間に、そ

の家が爆弾にやられてしまった」とある。その八月に「湖畔」〔三〇三枚〕が河出新人叢書として刊行される話があったが、結局、計画倒れに終わったという。英語の会話力を買われて、一一月よりＧＨＱに勤務。同年の『早稲田文学』一月号をめざして執筆した「時雨」は、空襲等のためにすっかり遅れ、結局一二月号に掲載された。

一九四六年二月、関前三八〇番地に移り、これより約二年間、旧中島飛行機工場の工員寮を改造した校舎の、以前舎監の住んでいた一劃に住む。そこでの生活は「更紗の絵」に詳細に描かれている。この頃、エール大学史学科出身の米軍中尉アーサー・ケネディーがジープでやって来て、互いに日米対抗のつもりでテニスを楽しむようすは、この作品のほか、「沈丁花」にも出てくる。五月より再び盈進学園に勤務し、授業の再開にともなってＧＨＱを退任。六月、次女の李花子が誕生。同月、初めての随筆を感想「将棋」として執筆し、『早稲田文学』七月号に発表。同じく六月に執筆した「麦秋」〔二〇〇枚〕を同誌の九月創作特集号に発表。この作品はのちの「麦刈りの頃」の関連作品だが、五年前に執筆した同題の作品の改稿か否かは未詳。賠償工場に指定された旧中島飛行機工場に招かれ、七月より英語運用能力を見込まれ、富士産業の渉外顧問を兼務。この時期の生活は「更紗の絵」に詳しい。七月に「最後の晩餐」〔一〇枚〕、八月に「ニコデモ」〔三五枚〕と「臨時列車」〔三五枚〕、九月に「敬礼」〔一〇枚〕、一〇月に「剽盗と横笛」〔三〇枚〕、一二月に「先立ちし人」〔三三枚〕を執筆。『早稲田文学』一二月号の文芸時評を担当。

一九四七年一月、「剽盗と横笛」を『月刊読売』に発表。同月、「灯影」〔三七枚〕を執筆。『早稲田文学』二月号の文芸時評を担当。二月に「旅愁」〔六〇枚〕および「秋のゐる風景」〔五五枚〕を執筆。後者はのちの「黄ばんだ風景」の原型にあたる。四月、谷崎精二の薦めで第一早稲田高等学院の時間講師となる。六月に、後年の「白い機影」の原型にあたる「白き機影の幻想」〔五七枚〕を執筆して、八月に、復刊された『文学行動』第一号に発表。七月、信州に旅行。同月に「湖畔」〔二二枚〕を執筆。八月、大洗に行く。同月、「バルセロナの書盗」〔四二枚〕を執筆。『早稲田文学』九月号に「先立ちし人」を発表。一二月に、Ｒ・Ｌ・スチヴンスンの「ジキルとハイド」のうち「一夜の宿」「ギタア異聞」の二編を翻訳。同じ頃に「白き機影の幻想」を『文学行動』に発表。

一九四八年一月、「秋のゐる広場」を『文学行動』復刊第二号に発表。同月、「鳥打帽の男」〔三八枚〕を執筆し、『文学行動』五月号に発表。二月に評論「粧へる近代」および短文「暗冥片々録」を『文学行動』

に発表。同月、習作を改作して後年の「小徑」の原型にあたる「細竹」〔四〇枚〕を執筆し、『早稲田文学』七月創作特集号に発表。四月に「紅い花」〔四二枚〕を執筆。六月、小沼丹訳の「一夜の宿」「ギタア異聞」を含む谷崎精二訳『ジイキル博士とハイド氏』が大虚堂書房より刊行。太宰治に対する追悼文として感想『『晩年』の作者」を執筆し、『文学行動』七月号に発表。七月、「M夫人の微笑」〔四二枚〕を執筆し、『文学者』一一月号に発表。八月に「人生横丁」〔一一六枚〕を執筆。九月、旧作「ニコデモ」を改稿〔二四枚〕。一〇月に日光旅行で湯元まで行く。

一九四九年一月、小品「地蔵の首」を執筆。『文学行動』新年号に「紅い花」、同誌二月号に「ニコデモ」、三月号にその「地蔵の首」、四月号に「バルセロナの書盗」を続けて発表。新制大学発足による第一高等学院の解消にともない、四月に理工学部専任講師となる。五月、W・V・ナルヴィグ『鉄のカーテンの裏』を藤井継男との共訳で読売新聞社より刊行。三月執筆の「ガブリエル・デンベイ」〔五〇枚〕を林房雄の薦めで『歴史小説』七月号に発表。六月に「アルプスの雪」〔四二枚〕を執筆し、翻訳「押花」〔一八枚〕を訳了。同月、後年の「汽船」の原型となる「ミス・ダニエルズの追想」〔一〇枚〕を執筆して『文学行動』八月号に発表。七月に「ドン・グレゴリオの失策」〔一五枚〕を執筆し、「白き機影の幻想」を改稿〔七三枚〕した。この頃三島に旅行。八月に「ペテルブルグの漂民」〔五五枚〕を執筆。同月、以後終生住み続けることとなる武蔵野市八幡町四丁目一〇番七号の住居の前身、当時の関前四二〇番地の家に住み始める。九月に、のちの「童謡」の原型とも見られる「忘れられた人」〔二八枚〕および「夜のフルウト」〔三一枚〕を執筆。一一月、蓼科に旅行、帰途、岡谷に立ち寄り、諏訪に遊ぶ。